



香田 忠維

元 中東協力センター 理事長

中東協力センター 50 周年を迎えて

中東協力センターが 50 周年を迎えられたことを心よりお祝いいたします。

私は、40 周年を迎える直前に理事長を務め、広い視点からご指導賜った奥田会長、またサポートしていただいた事務局の皆さんに感謝申し上げます。

仕事始め

2011 年 3 月 11 日、まだ理事長に就任する前ではありましたが、サウジアラビア東部のアラムコ本社を訪問しました。1938 年に掘り当てた最初の大油田 7 号井を見学し、ホテルに戻ったところ、日本は大変なことになっていると聞きテレビで東日本大震災を知りました。

理事長就任直後の同年 4 月 13 日、サウジアラビア・リヤド開催のジャナドリア祭では、奥田会長と日本館パビリオンを訪れ、サウジ人にも好評であった日本の伝統的演奏やパフォーマンスを拝見しました。その後、奥田会長はナイミ石油大臣及び他の閣僚と面談、またビジネス関係者とも懇談され、トップ外交の大切さを学びました。

センター理事長としての意気込み

私は色々な職場を経験しましたが、振り返ってみると今は当たり前と言われる「経済安全保障」に多く関わり、数々の失敗や苦い経験を重ねてきました。

まずは 1973 年の第 1 次石油危機から始まります。

アラブ諸国とイランなどの産油国がカルテル OPEC を結び、1973 年 10 月に石油価格の大幅値上げ、石油の輸出禁止措置をとりました。これを契機に日本では重化学工業を中心とした高度経済成長は終焉を迎え、国民一般の生活もトイレトペーパー買占め、狂乱物価など大きな影響を受けました。私は通産省輸入課で外為法輸入貿易管理令の担当で、巨額の石油代金の送金業務にあたっており、日本から産油国への巨大な所得移転を目の当たりにし情けない思いをしました。

1975 年には資金調達のため社債の発行が必要となった電力ガス業界に対応して、社債発行限度を引き上げる特例法の制定を担当し、1981 年には石油備蓄政策を担当して 180 日分の備蓄を目指し、1995 年から 3 年間オマーンに赴任して、中東の自然環境、宗教や生活の様子的一端に触れていたため、以上の経験を生かして中東協力センターの仕事に何らか貢献できるかもしれないと思いました。

センターでの活動のハイライト

1. 現地会議（毎年開催される日本の官民の関係者のすべてを結ぶ場の提供）

センター活動の目玉である「中東協力現地会議」は、ほぼ 50 年間欠かさず開催を続けています。以前はウィーンでの開催が多かったのですが、奥田会長の指示で、2011 年イスタンブール、翌年ドーハと中東現地で開催しました。いずれの会議も数百人の製造業、商社、金融機関など広範な分野の企業関係者が一堂に会し、政府、学識者、中東駐在の大使の方々に講演いただき熱心に討議する様子は壮観でした。

2. 中東諸国の要望に耳傾ける協議

中東産油国は所得水準も高く、支援よりは対等の関係での協力が基本となるため、先方の考えや要望を直接把握することが肝要であり、サウジアラビアとの「日サ・ビジネスカウンスル」、クウェートとの「日ク・民間合同委員会」、アブダ

びとの「日ア・経済協議会」など2国間の協議体が逐次設けられました。2011年5月にはアブダビのスネィディー長官を表敬、また2012年11月にはアブダビで同協議会が開催され、日本から石油業界はじめ多くの要人が参加して有意義な会合となりました。

とりわけ2012年2月に東京の芝パークホテルで「日サ・産業協力フォーラム」と一体化して開催された「日サ・ビジネスカウンスル」は、双方合わせて800名に上る参加があり、日本からサウジへの工場進出がいくつか決まるという、センター事務局総力挙げた成果となり大いに盛り上がりました。最後に、タウフィーク商工大臣（現宗教大臣）とスタッフ全員と写真撮影したことは忘れられない思い出となりました。

3. 水問題への取り組み（プロジェクトの受注、セミナー、ミッション派遣）

中東地域は雨が少ない地域で、砂漠が多く恒常的に水が不足しており、海水淡水化に力を入れてきました。オマーン的首都マスカットのグブラ地区の海水淡水化プロジェクトには日本の逆浸透膜技術が、またサウジアラビア・ジュバイルの最大の淡水化プラントにも日本の技術が採用されています。2013年1月リヤドで開催された水資源セミナー、同時期にアブダビで開催された「Future Energy Summit」でも水問題に焦点が当てられました。

中東の水問題は今後も続き、センターが事務局である官民合同の「中東水資源協力推進会議」を通じて、セミナー開催やミッション派遣など重要事項として取り組んでもらいたいと思います。

4. 人材育成事業（日本式教育も取り入れて）

サウジアラビアの首都リヤドの近郊に2009年9月に設立されたOA機器・家電の修理技術を学ぶ「電子機器・家電製品研修所（SEHAI）」に対し、センターの人材育成事業として、サウジアラビアではユニークな日本式の技術教育（しつけ・規律）を取り入れました。2011年9月の一期生卒業式典で、私がアラビア語でスピーチしたところ、生徒さんたちは途中でアラビア語と気が付いたようで、ざわついたのが印象的でした。2021年に日本の支援は満了しましたが、その後も運営を続けているとのことでした。

5. 投資交流の推進とサポート体制

中東諸国からは雇用の創出と技術移転が伴う日本企業の直接投資が強く打ち出されたため、各種のセミナー、ミッションや専門家の派遣、協議体の設立が行われてきました。サウジアラビアでは、いすゞ自動車は東部アルコバールに進出を決定されたので本社を訪問して感謝の意を伝えたと、経産省からの強い要望があったと知り、センターとしてもサポートを続ける責任があると思い、この東部にセンター事務所の開設を経産省にお願いしました。2013年2月に、いすゞ自動車工場を視察、次いでダンマンで開催された「日サ・ビジネスカウンスル」に参加、更には東部地区の知事を表敬し支援をお願いしました。2015年に、東部商工会議所の協力を得て「ジャパン・インベストメントデスク」が設置されました。現在この地区には日本企業28社が進出しており、トラック生産を続けるいすゞ自動車は大幅な増産を達成し昨年10周年を迎えられました。記念式典にはセンターの幹部も参列されたと聞き嬉しく思いました。

6. イラクとの関係強化（バクダッド事務所の開設）

当時、民主党政権下の松下忠洋金融担当大臣は奥田会長との懇談で、熱心にイラクとの関係の重要性を語られ、また経産省も強くイラクとの関係構築を進めていました。2011年9月、私はバクダッド空港からヘルメット・防弾チョッキを装着し、警備会社を守られて戦車が警護するバクダッド市内に入り、カウンターパートのアラジー国家投資庁長官と面談しました。同年11月にマリーキー首相が来日した折の「日イラク・産業協力会議」ではアラジー長官とともに共同議長を務めました。2012年6月、バクダッドのセンター事務所の開所式では、私はアラビア語で挨拶しましたが、いつになく緊張して参列者をハラハラさせたことを思い出します。同年11月のバクダッド国際見本市では、日本ブースに展示したグレンダイザーの人形が大人も子供にも大人気で、多くの閣僚も足を運んでくれたことに誇りを感じました。

現在はISによる混乱も収まり、バクダッドの治安は改善している中、センター事務所も活動を継続しています。石油資源開発（株）によるガラフ油田の開発生産サービス契約、また日揮によるバスラ製油所近代化プロジェクト受注などが進められており、さらなる進展を期待しています。

最後に経済安全保障の任務を遂行する中東協力センターの使命は不変

2011年の東日本大震災後、エネルギーの中東依存度は再び増大しました。中長期的に石油ガスの化石燃料の需要は減少、さらに脱炭素の動きがその減少傾向を加速させる動きのなか、中東諸国も対応を急いでおり日本としてどのように中東諸国との関係を維持強化するのでしょうか。

政治的にも依然として不安定な中東地域で、アメリカの存在感が低下しているとはいえ、国の安全をアメリカに守ってもらいたいというのが湾岸諸国の本音である以上、アメリカの中東政策に目が離せません。

イランも含めた中東諸国との友好関係を保つうえで、50周年を迎えたセンターが果たすべき役割、即ち日本の経済安全保障の一翼を担う使命は大きいと思います。

センターが良きパフォーマンスを発揮され、政府、関係者、そして中東諸国の信頼を得て益々発展されますことを祈念いたします。

